ヨーガ派の禪定説

——佛教の四禪説との比較——

花　木　泰　堅

ヨーガ派は心作用の滅を以て解脱と見做す。この解脱の狀態は心一境性或は三昧であると所々に説かれている。そしてこの解脱の狀態を得るための實踐道も種々に説かれている。ここでは所々に説かれている三昧＝禪定の相互關係を考察する。更にヨーガ派の禪定説は佛教の四禪説に非常に近い關係にあると思われるので、これとも比較檢討を試みる。

先ず最初にヨーガ派の禪定説について考える。Yogasūtra (YS.) の中で三昧を説く個所は三つある。第一は有想三昧 sampraj̃ñāta-samādhi と無想三昧 asampraj̃ñāta-samādhi を説くものである。このうち有想三昧は修行 abhyāsa と離欲 vairāgya の實修によつて得られるもので、修行とは心作用の靜止のための努力であつて、長時間にわたり、無間斷に、熱心に實修されて堅固なる境地をもたらす實修である。離欲とは見たり、聞いたりした對境に對する渴愛から離れた人に起る支配の意識であつて、この意識が最上となつたときは、Puruṣa に對する知が Guṇa に對する執着から離れたときである。これら二つの實修が有想三昧を得るための道とされている。そしてこの三昧が有想であるとするのは「尋 vitarka と伺 vicāra と喜 ānanda と我見 asmitā の形を隨行するが故 (YS. I. 17)」であるとされている。これに對する Vyāsa の Yogabhāṣya (YBh.) は「尋とは心が所緣をもつときの心の麁大な享受である。伺とは心の微細なる享受である。喜とは心が所緣をもつときの心の喜び hlāda である。我見とは一我の意識 ekātmika-saṃvid である。それらのうち第一（の三昧）は（尋、伺、喜、我見の）四を隨行するものであり、有尋三昧である。第二（の三昧）は尋を缺くもので有伺三昧である。第三（の三昧）は伺を缺き有喜三昧である。第四（の三昧）はそれ（＝喜）を缺き我見のみを有する三昧である。これら全ては有所緣三昧 sālambana-samādhi である」と説明している。つまり有想三昧は所緣を有するものであつて、

有尋、有伺、有喜、唯有我見の四種の三昧をいうのである。この有想三昧の上に無想三昧が置かれている。それは存在縁 bhavapratyaya と方便縁 upāyapratyaya の二方便によつて得られるものである。存在縁が離身者 videha と Prakṛti へ滅入した人 prakṛtilaya に屬する方便であるに對して、方便縁は一般修行者 yogin に屬するもので、信 śraddhā と精進 vīrya と念 smṛti と三昧 samādhi と慧 prajñā の五法[1]の實踐德目を內容とする。この實修によつて「潛在力のみを殘す（YS. I. 18）」無想三昧が得られる。

第二は有種三昧 sabīja-samādhi と無種三昧 nirbīja-samādhi を說くものである。有種三昧とは「心作が用滅盡すれば、心の本性は美しい寶石の如くで、取者 grahītṛ と能取 grahaṇa と所取 grāhya とに止住し、それに着色された等至 samāpatti が得られる。（この等至に四種あつて）聲 śabda と對象 artha と知 jñāna との分別 vikalpa によつて混合しているのが有尋等至である。また、記憶が完全に淸淨にされた場合に、心の本性は虛空の如く、對象 artha のみの輝く狀態が無尋等至といわれる。これによつて、まさに有伺（等至）と無伺（等至）は微細なる對境をとると說明される（YS. I. 41-44）」と YS. に述べられておるところから、有種三昧は等至の狀態をいい、有想三昧の如く、有尋、有伺、無尋、無伺の等至の四種類を有している。次に無種三昧については「無伺等至が得られたるとき、修行者 yogin は三昧慧 samādhi-prajñā を得る。この慧によつて潛在力が生ずる。この慧より生じた潛在力はその他の潛在力に對しては拘束する働きをなす。從つて三昧慧より生じた潛在力を滅すれば、全てが滅することとなる。この狀態が無種三昧である（YS. 47-51）」と YS. に說かれている。この第二の記述から考えられることは、有種三昧と無種三昧の區別は潛在力の有無によるものである。從つて、潛在力も滅したる無種三昧の方が潛在力を殘している有種三昧よりも深い境地といえよう。

第三はヨーガの八支分中總制 saṃyama といわれるもので、その最初に位するのが心持 dhāraṇā である。これは「心を一つの場所に結びつけること（YS. III. 1）」である。次の靜慮 dhyāna とは「心持に際して意識作用が一致融合すること（YS. III. 2）」である。最後の三昧 samādhi は「靜慮に際して、唯對象のみが輝き、（心の）本性は虛空の如くなつた狀態（YS. III. 3）」と說かれている。

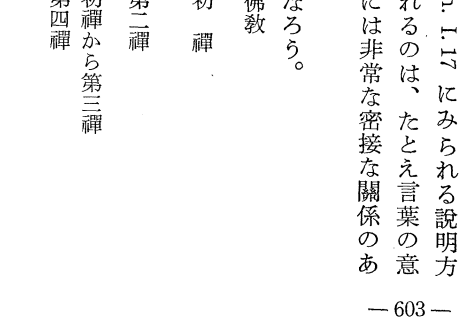
今、上述した種々の記述の相互關係を見ることとする。[2] まず第一と第二の夫々の間に於ける階位は明らかである。卽ち有想より無想、有種より無種の方が高位である。從つて問題となる第一は有想と有種との間である。有想三昧は尋、伺、喜、我見を隨行するとしてあり、有種も亦有尋、無尋、有伺、無伺等至であるとされているところから、有想の尋と伺は

有種の有尋、無尋に相應する。有種の無尋と無伺とは對象とするものの麁と細との別はあつてもそれを認識しないことを意味し、更に記憶も完全に淸淨とされている狀態であるから有尋、有伺よりも高位と考えられる。これに對して有想の喜と我見は既に認識がなくなり自內證のものであり、又 YBh. の所說から無尋、無伺よりも高位となる。次に無想と無種の間を見ると YBh. には等しいものとしている（YBh. I. 18）が、YS. の所說には潛在力のみを殘すのを無想とし、それもないのが無種としているから、無種は無想より高位である。更に、有種と無想との間は、有種の全てが有想に含まれ、有想より無想の方が高位であることも YS. から明らかである。このような結論から第三の箇所を考えると、第三の最高位の三昧が有種の無尋と全く同じである。心持、靜慮はこの三昧の前段階である。別言すれば有尋より高位であるとは考えられない。[3]

これに對して、佛敎の四禪說では初禪は「離欲惡不善法、有尋有伺、離生喜樂」、第二禪は「尋伺寂靜故、內等淨故、心定一趣故、無尋無伺、三摩地生喜樂」、第三禪は「由離喜故、住捨、念正知及樂身正受、聖者宣說、成就捨念樂住」、第四禪は「由斷樂及由斷苦故、及先已斷喜憂故、不苦、不樂故捨念淸淨」と定型句として說かれている。[4] 今、この佛敎の四禪說とヨーガ派の所說を比較檢討しよう。初禪の「有尋有伺」は有想の

尋・伺、有種の有尋・有伺を、第二禪の「無尋無伺」は有種の無尋・無伺を、更に初禪の「離生喜樂」、第二禪の「三摩地生喜樂」、第三禪の「捨念樂住」の喜或は樂は有想の喜を夫々想起せしめる。また、有想の我見は、上述の如く、一我の意識の享受若しくは一我的感受である。これについては松濤誠廉敎授の研究によると、ジャイナ敎の Śukladhyāna の第四の「Vyuparata-kiriyā-nivṛtti」と名づけられるところの「自己が自我に沒入する狀態」と見ることが出來、この Śukla. dhyāna の第四は佛敎の第四禪に相應するとされている。[5] 從つて、有想の我見は第四禪に想應すると考えてよいだろう。[6] このような用語の酷似、及び YBh. I. 17 にみられる說明方法の四禪說との類似、等の認められるのは、たとえ言葉の意味內容に差はあつても、[7] 兩派の間には非常な密接な關係のあつたことが知られる。

今これを圖示すると次の如くとなろう。



1　これは佛教での所謂五根五力と同じであることが既に指摘されている。木村泰賢「阿毘達磨論の研究」四五一頁、岸本英天「宗教神秘主義」一一〇頁、その他 H. Jacobi: Über das ursprüngliche Yogasystem S. 42; Woods: Yogasystem of Patañjali. p. 45. note. 等參照

2　上述の記述は夫々獨立に傳承されたのがYSを編纂されるに當り三個所に編入されたであろうとの疑問は殘るが、夫々の記述の内容が非常に近似のものと考えられるので、こゝに試論として比較する。

3　このように考えてはじめて、「總制は有想三昧に對して内支であり、無種三昧に對して外支である（YS. III. 7～8）」との記述が理解される。

4　四禪説の詳しい研究は、金兒默存「四禪説の形成とその構造」（名古屋大學論集十八卷、一二三頁以下參照

5　松濤誠廉「ジャイナ教の禪定について」（九州大、哲學年報第二十三輯、八〇頁以下）

6　即ち佛教の四禪説とヨーガ派の禪定説は殆んど同じといえる。

7　ヨーガ派に於ける尋伺の意味は、對象を認識する場合の、對象の麁と細をいうに對して、佛教では「尋伺者心麁細」とし、尋を心の麁なる性、伺を細なる性と説明している（倶舍論第四大正二十九　二一頁中）

尚、拙稿「禪定道の考察」（日本佛教學會年報三十號掲載）を合わせて參照いたゞきたい。

新刊紹介（五）

野上俊靜編「敦煌古寫經」（大谷大學所藏）
大谷大學敦煌古寫經について　野上俊靜
資料篇（附）解説・校勘表・文字辨異表
研究篇
敦煌寫經の資料的價値　平野顯照
敦煌寫經跋文より見た佛教信仰　滋賀高義
『無量壽經』漢譯考　野上俊靜
——敦煌本神瑞寫經の紹介——
敦煌本『阿毗曇經』卷廿六の跋について　野上俊靜
——則天武后時代僞濫佛教に關する一資料の紹介——
菩薩藏修道衆經抄について　滋野井恬
大谷大學藏敦煌本『普賢菩薩説證明經』について　野上俊靜

B5版　本文一七九頁　圖版九一頁
大谷大學東洋學研究室刊　定價五、〇〇〇圓